

5. 白石踊の衣裳と持ち物

衣裳は一般の盆踊のように従来島の伝統的行事として楽しむ場合と、観賞の対象となる場合とに大別される。

前者の場合は凡て家で平素使用している着物を身につけて踊った。奴踊の若衆は素手素足で鉢巻を締め、各自持っている法被はっぴを着たり、浴衣掛ゆいかけで尻ししよを端折はしりって踊った。娘も振袖や浴衣で手拭てぬぐいの頬被ほおぼりりをして踊った。男踊や女踊の紋付の着物もそれぞれの家に伝わる家紋入りの物を着用した。音頭取や太鼓打ちも浴衣の着流しであった。音頭台もかつては酒樽を逆さにしたものをを用い、これに普通の傘かさ(からかさ)をさした音頭取が上った。また昭和初期迄は仮装も盛んで、刀を差した浪人や、鎌かまを持ってあ綿入わたいりの類を身につけた百姓姿などが見受けられた。仮装を競うようにもなって年々の人気を博した話も伝わっている。

要は各自有り合わせの物を着たのであって、殊更ことさら盆踊のために衣裳を整えるということはなかった。尤も近年は普段着ではあるが、ズボン・シャツ姿の男性や洋装の女性が浴衣姿の踊り子の中に入り交り、昔ながらの盆踊の情緒は失なわれつつある。

後者について見れば、郷土芸能の無形文化財的認識が高まってきたのに鑑み、1955年(昭和30)白石島観光協会が次のような衣裳をユニフォームとして整えた。その際、踊りの盛んであった元禄の頃を想定して、岡山市在住の日本画家・村川源之助(のち弦納と改名)氏が衣裳の考証を行った。

(1) 男踊 芥子色かひしの紋付着流し、この上に黒の紋付羽織を着て、手拭てぬぐいの上に竹の子笠(竹の皮で作った粗製の浅く大型の笠。番匠笠ともいう)を被り、白足袋に草履をはく。

(2) 女踊 黒紋付の着物(紋服)に太鼓結びにした丸帯(広帯)をつけ、手拭てぬぐいで両頬つまほほを覆ってから端折はしり笠(端を下へ折り曲げた菅笠)を被り、白足袋に草履をはく。

(3) 娘踊 薄青色の紋付振袖に半幅帯の結び切り、更さらに紅の垂らし帯(扱帯)をして、頭には紫色の布を御高祖頭巾おこま(四角な布地に紐を付けたもの。目の部分だけを出して頭部、面部を包む)風に被り、白足袋に草履をはく。華やかな衣裳は法被姿の奴踊、笠踊と好対照をなす。

(4) 奴踊 黒地紋入り半纏(印半纏)の奴姿に細帯、白の猿股、青色の前隠さかし(下り)、白の脚絆(三里当て)を付け、向う鉢巻を締めて素足に草履をはく。笠踊の場合は、この衣裳で小型の竹の子笠(でんばち笠)をもつ。

(5) 梵天踊 衣裳の上にボール紙製(かつてはブリキの小片を綴って作った)の鎧をつけて梵天(1m余の幣串の両端に畳んで細長く切った半紙を取付けたもの)をもつ。鎧、梵天を用いての切り合いの所作などは源平合戦の亡霊供養起源説に付会したものであろう。

(6) 音頭取 紋服、袴姿で白足袋に草履をはき、大型の傘を指す。この傘は精霊を迎えて回向することを目的とするが、同時に音頭の声が上方に拡散することを防ぐという音響的效果も考慮されていると思われる。

(7) 鼓手(太鼓打ち) 芥子色の小袖に白の襷(たつかけ)を掛けて同色の裁着袴(かきん)(軽衫)を着用し、白の幅広の帯を体側で締める。向う鉢巻を締めて白足袋に草履をはく。

以上は古い時代の形態を模して作られたものであり、一種の仮装である。衣裳の一部として用いる白足袋や手拭、襷は、盆踊を神聖な儀式とみなす観念から生じた習慣である。

6. 白石踊の唄（口説）

白石踊の唄（口説）は、特に白石島に因んで作られたものではない。それは近世、上方から伝わって瀬戸内海筋にも流行した浄瑠璃・歌舞伎の詞章を適宜取捨選択して転用、構成したものである。

当初は大師和讃等を口演していたらしいが、やがて浄瑠璃や歌舞伎の世話物（江戸時代の町人社会の世態、風俗、人情を背景として当代の出来事に取材したもの）、時代物（江戸時代及びそれ以前の、特に武将の軍記等に取材したもの）を盛んに取入れて口演するようになったという。その時期は、貞享・元禄・享保時代（1684～1735）に古浄瑠璃を革新大成し、以後、文化・文政（1804～30）にかけての1世紀半におたる浄瑠璃隆盛の基を作った近松門左衛門らの浄瑠璃作家や、これと相互に影響しあった歌舞伎脚本作家の作品が全国を風靡するに至った時期と一致するのであろう。かつては杜氏などの出稼のために今日以上に京阪神地方に赴く者が多かったというから、彼ら出稼者が新作の浄瑠璃本などを買求め、帰郷後、競ってこれを口説きに改作したのであろうか。讃岐の金毘羅参りの際、浄瑠璃本を購求して来ては音頭本に改作したという話も島の古老達によって語り伝えられている。

最盛時には60余種の唄があったともいわれるが、そのうち島民に膾炙、伝承されてきたのは次のようなものである。括弧内は浄瑠璃・歌舞伎の原題及び梗概である。

「お初徳兵衛（上・下）」（近松作、曾根崎心中。大坂内本町醬油屋平野屋の手代徳兵衛と北の新地の天満屋の遊女お初とが曾根崎天神の森で情死した事件を脚色）

「おさん茂兵衛」・「曆尽し」（近松作、大経師普曆。京都四条烏丸の大経師・以春の女房のおさんが誤って手代茂兵衛と姦通し、洛中引廻しの上、死刑になった事件を脚色）

「阿波の鳴門」（近松半二他作、傾城阿波の鳴門。阿波徳島の玉木家のお家騒動を描く。旧臣十郎兵衛・お弓夫婦が主家のために苦勞し、生別れの我が娘お鶴を知らずに殺す場が有名）

「毛谷村六助」（梅野下風他作、彦山権現誓助剣。豊前毛谷村生れの剣客・毛谷村六助が吉岡一味斎の娘を助けて父の仇を討たせたので、小倉城主・立花統虎はこれを賞し、貴田統治と改称せしめたという実説を脚色）

「石童丸（上・下）」（並木並輔他作、菟萱桑門筑紫鞆。高野山に世を遁れた菟萱道心をその子石童丸が筑紫を出て山中に訪ねるといふ筋）

「お半長右衛門」（菅専助作、桂川連理棚。信濃屋の娘お半と隣家の帯屋長右衛門との桂川心中を脚色）

「ひらかな」・「松尽し」（文耕堂他作、ひらかな盛衰記。源義経の木曾義仲討伐から一谷合戦までに樋口次郎・梶原源太をあしらって脚色）

「お夏清十郎（上・下）」（近松作、五十年忌歌念仏。姫路の宿屋但馬屋の娘お夏と手代清十郎が駈落ちしようとして捕えられ、その上金子紛失の嫌疑で清十郎は死刑、お夏は発狂したという巷説を脚色）

「賽の河原」（原作不詳）

「国姓爺（上・下）」（近松作、国性爺合戦。明朝の遺臣鄭芝竜の日本亡命中の子和藤内〈国姓爺〉が明朝の回復を計ることを脚色）

「揚巻助六（上・下）」（津田治兵衛作、助六所縁江戸桜。花川戸助六、実は曾我五郎が紛失した名刀・友切丸詮議のため吉原に出入し、愛人三浦屋の遊女揚巻に横恋慕する髯の意休に喧嘩を売って遂に刀を奪いかえすという劇）

「丹波与作」（近松作、丹波与作待夜小室節。丹波の馬方・与作と東海道の名物女・関の小方との情事を脚色）

「梅尽し」（作者不詳。梶原源太節の梅。梶原源太景季が一谷・生田の森の源平の合戦で簀に梅花の枝を挿して奮戦した故事を脚色）

「山田の露」（原作不詳。）

「中将姫」（原作不詳。）

「那須与一」（作者未詳、奈須与一。「平家物語」巻11の那須与一のことをそのまま採ったもの。）

「お梅伝次（上・下）」（作者未詳、お梅伝次郎兵庫口説甚九節。享保以後、兵庫・大阪地方に行なわれた流行音頭——踊歌——の一。）

「夷屋の甚九」（作者未詳、長崎ゑびや甚九。長崎の海老屋甚九が親の代からの小間物売をやめて織物類を積んで海路から上って来て、大阪新町の遊女、道芝と深い仲になったことを綴る。「お梅伝次郎」と同じく流行音頭の一つ。）

「鎌倉山」（菅専助・中村魚眼作、有職鎌倉山。天明4年3月、佐野善左衛門政言が江戸城中桔梗の間で老中・田沼意次の子・若年寄田沼意知を斬って同4月切腹を命ぜられ、これが原因で田沼の没落した事件を、北条頼時時代の世界として脚色したもの。）

「背山」（原作不詳。）

「けんなんお鶴」（原作不詳。）

「加賀のお菊」（宮古路豊後掾作、加賀のお菊妹背中酌。俗謡で名高い加賀の菊酒屋の娘お菊と相思の仲の丁稚幸助がお菊の両親の反対を悲しみ、情死するという事件を脚色。）

「水尽し」（原作不詳。）

「お関」（原作不詳。）

「坊主落ち」（原作不詳。）

「七回忌」（原作不詳。）

ここに現在もよく行われる唄を掲げる。（歌詞は『白石盆踊唄』、『白石踊の資料』、『白石踊音頭』のそれを照合したものである。）

一、那須与一 (十三分)

その名触れたる下野国
那須与一が誉れの次第
形は小兵に御座候へど
積るその年十九歳にて
矢をば一手に名を万天に
のぼし給いし所は何処
四国讃岐の屋島の磯で
源氏平家の御戦いに
平家方より沖なる船に
的の扇を立てたる時に
九郎判官此の由御覧
那須与一を御前に召され
与一御前に相ひ詰めければ
時に判官宣ふやうは
沖に立てたるあの扇をば
矢頃遠くに射落して
敵や味方に見物させよ
畏まつたとお受けを申し
御前をこそは立ちにける
与一その日の出で立ち見れば
褐赤地の綿を召され
白糸緘の鎧を着て
弓は重藤切封の矢をば
御首肩裾襟搔き合わせ
コレ黒駒引き寄せゆらりと乗りて

小松原より波打際へ
しんずしんずと歩ませければ
風は激しく波荒くして
的の扇も定まらざれば
射打つべき様もなかりける
与一暫く眼を塞ぎ
南無や八幡那須明神と
力合わせてあの扇をば
射させ給へと願念深く
例の鎗矢打ち継ぎつつ
切つて放てば扇の的の
要際をばふつと射切り
(海舟港の水ぞ誉れぞ)
扇の的は
揉みに揉まれて海にと落つる
へ射たり与一と誉めにける
沖の平家は船端叩く
陸の源氏は籠を鳴らす
何れ功名は品々あれど
戦さ半ばの見物事は
一言切り) 那須の功名と名の立つ
ものよサア
唯詞) いとど名の立つ
名の中に

二一、石童丸(上)(九分)

昔語りを聞くさへいとど
衷れなるかや石童丸は
父の行方を尋ねむ為に
母を麓の玉屋が茶屋に
預けそれより高野に登る
幼な心のいと優しくも
九万九千の御寺々を
尋ね巡れど行方が知れず
是非も泣く泣く若君様は
奥へ参らせ給ひけり
折節父の荇萱こそは
花の御番に当らせ給ひ
花の御籠手に持ちて
下へ下らせ給ひし時に
隠れ御座らぬ無明の橋で
げにや親子の奇縁が不思議
両方互いに行き逢い給ひ
そこで若君かの御僧の
袖を控えてのう御僧様
剃りて間も無き今道心が
もしも御山に坐すなれば
教え給へと涙と共に
問はせ給えばかの御僧は
さては御言葉愚かな稚児よ

そんな尋ねをしたなら仮令
何時が何時まで尋ねたとても
へ知れることではなきぞやエイ
これ此な子
人を尋ねて遂知れよいは
そんじよ某何右衛門とて
書いて立札建て置くなれば
逢ふと思へば添書をする
否と思へばその札を引く
凡そ二日か三日で知れる
されば左様の事にてあれば
どうぞ情けに其の札を
書いて給はれのう御僧様
ハア嘆かせ給ふ
易き事なり書き得させんと
されば館に御座れや御稚児
(言切り) 茅堂までナア
行かうずものよサア
(雑詞) いたら寄るもの語るもの

二一ニ、石童丸（下）（九分）

扱まそれよりもかの御僧は
石童丸を我子と知らず
茅堂まで連れ行き給ひ
国は何処どこぞ名は何といふ
へ名告り給へとありければ
されば国こそ筑紫に於て
松浦左衛門重しげうじ氏殿よ
頃は三月上旬の頃
御一門中ちゅうが寄り集まりて
花の御会をなされし時に
父の持ちたる御盃に
蕾一房吹き入れければ
是これを菩提の御種として
都方みやがたなる新黒谷で
髪を下して高野に登る
父の御年二十歳や三歳みよし
母の御年十九歳にて
姉の千代鶴三みつの歳に
吾は胎内なな七月半で
見捨て置かれし嬰兒あやこなるが
生まれ成人名を石童丸と
聞くに御僧筆をば捨てて
包つつむに余る涙の体を
見るに若君さて不思議やな
御僧様こそ筑紫の訛まご
殊に話に御落涙は

さては尋ぬる父上様か
へ名告り給へと泣き給ふ
かかの御僧は
不審尤もさはさり乍ら
御事尋ぬる今道心と
吾は即ち相弟子なるが
是非も無きかや尋ぬる父は
遂に空しく過ぎ行き給ひ
日こそ多けれ今日命日と
騙し給へば石童丸は
たわい涙にくれ給ひしが
せめて悲しき父上様の
御墓所を教えてたべと
嘆き給へばお道理なり
いざや教へん此れぞと言ふて
何の故なき無縁の墓を
教へ給へば石童丸は
やがて卒塔婆に抱きつきすが継り
声も惜しまず泣き給ひしが
溜り水よさア
（言切り）袖に涙のナア
（難詞）澄まず濁らず出ず入らず

三、丹波与作（七分）

松は常磐とこはのその色青て

コレ眺ながめに飽かぬ松風の

丹波与作と菜種なづなに蝶ちょうの

連れつ纏もつれつ小万こまんが恋を

かの折節せつせう仮寝かひねの夢の

へ覚さめて恋しき紫むらさきの

色も変らず立つ名も富士と

白しろきあらざるその夕暮ゆふぐれに

〕あり思おもひ思おもひに染そめし文様もんやうの

まいだれがけで

ハアしやなしやな出づる

中に小万こまんが唯ただ淑しとやかに

へ泊とどりじやないか泊とどりやんせ

露つゆの情なさけに引き止められて

濡ぬるる言葉ことばに又濡ぬれ掛かかる

〕ありいいやらしい何なにぞ往いのうと

振り切る袂たもとに名残なごりを惜おぼしむ

分わけて与作よさくに誠まことを尽つし

仇あだに咲さかばや御山ごさんの花はなと

なるも厭いとはず唯一筋ひとすぢに

〕あり変かるまいぞと口くちでばつかり

言ことはしやんしても

ハアそうしやんしたが

〕あり腹はらが立つわいのと

手てにも溜こらぬ黄金こがねを捨すてて

へほんに誠まことにそうじやそうじや

辛からいわいのと背せ中ちゆうをふわと

叩たたく格子こしや早はやや東雲しののめの

（言こと切り）別わかれ悲かなしきなア

鐘かねを打うてばさア

（雑ざつ詞し）鐘かねと撞つ木もくと合あへば鳴なる

四一、揚巻助六（上）（八分）

鹿に紅葉や柳に燕

恋に偽り傾城に金

人は一代名は末代と

恋の長は都の町で

その名万屋助六と言ふて

公男自慢のホ：違り話

上す女郎はそれ島原の

遊女なれども情の深き

器量よりかも名は揚巻と

聞くに助六少将様の

小野小町を恋し給ひて

通ひ給へと遂には小町

一度情の下紐解かず

それをこうよと唯引き替へて

通ふ千鳥は皆お互いの

身性なれども此の助六は

たつた一夜に千万両の

金を使ふて恋路を照らす

粹と呼ばれて名は高砂の

浦の追風引き船禿

恋の恥辱に乗る四国方

屋島乱れて方々と

今は紙子一重の無様となりて

知恵の鏡も搔き黒髪の

乱れ心のそこひの水と

血筋家法の詮方よりも

覚悟すれども迷いは一つ

（言切り）どうぞ島原へナア

行こうずものよさア

（雅詞）いたら寄るもの触るもの

四一、揚卷助六 (下) (八分)

扱も助六涙の袖に
絞り暮らすも恋路の闇に
ハ迷い果てつつア…定めなし
花鳥風月のその戯れに
可愛がったり又がられたり
仮に遊女の徒思ひをば
縁求めてその邯鄲の
枕二つに書く起請文
何時の間にかは軒端の梅に
鳴くは鶯げに夏の虫
蟬の羽衣身も焦がれ行く
例の揚げ屋に立ち寄り見れば
伊予の大尽この四五日は
とんと揚卷揚げ詰めにして
後は根引きの談合となり
それと聞くよりさて助六は
胸も塞がり気も狂乱の
慣れし揚げ屋の座敷に行きて
顔と顔とを見る間の山
ハ三味もしどろのホ…
野辺より貴方の共とては
連るる殿御に助さんなぞと
銚子一杯涙と共に
他所を見るのも唯空の態
それを助六逆さまに聞く
流れ遊女の自棄傾城め
嘘の空泣き真実顔で
凡そ三千三百両を

使い果たしてこの態と形
憎や腹立ち胸騒ぎやと
やがて太夫の手房を掴み
面を幾つも張り廻すれば
これは河内の油屋内儀
恪気違いで腰元振りを
叩き殺すも皆恋故と
此れは其の人了見違い
深き思ひはそれこげんぶし
辛き勤めも己様故と
わつとばかりに顔をも上げず
ハ暫し絶へ入り泣き沈む
漸う揚卷顔振り上げて
ハア主さへ不首尾のさて御事を
十日手前にさる方よりも
話聞くより覚悟を極め
襟を引き上げ金紗の縫いの
守り袋を取り出だしつつ
此れに書き置き認めあると
聞くに助六手を合はしつつ
扱も扱もと涙を浮かべ
今は二人が好みし夢に
悟り行かむは優曇華の花
(言切り) げにや名残のナア
切り処よさア
(雑詞) 今が思いの切り処

五、賽の河原 (十七分)

ハアそれ世の中の定め難きは
無常の嵐

散りて先立つ習ひといへど
わけて哀れは冥途と娑婆の
賽の河原でサーンヨホホー
止めたり

ハ二つや三つや四つや五つ：

ハ十よりうちの嬰兒なるが
朝の日の出に手を取り交し

人も通はぬ野原へ出でて
土を運んで上りつ下り

山の大将我一人じやと
言ふもあり又片辺りには

石を運んで塔築く塔や
コレ一重積んでは父様のため

父の御恩と申せしことは
ハア須弥山よりも高うして

言葉に何と述べ難し
二重積んでは母様のため

ハア恵みの恩の深きこと
ハ蒼海よりも深いぞや

三重積んでは
郷里兄弟我が身のためと

幼な心に涙の回向
何れ仲良く遊びはすれど

日暮れ方には物寂しさに
親を尋ぬる乳母来いと言ふ

ハ声は木霊にサーンヨホホー
響きたり

ああら不思議や積み重ねたる
小石忽ち悪鬼となりて

厄の塔をば積もとはせいで
何故に遊ぶや早や疾う疾うと
鏡照る日の眼も光り

ハ何処ともなく失せにけり
かかる嘆きのその折節に

地蔵菩薩は現はれ給ひ
何を嘆くぞ子供よ子供

此処へ来ひとて髪搔き撫でて
顔を摩りつ衣の袖を

翳し給へば皆取り付いて
我は何故此処へは来たぞ

父さん母さん何故御座らぬと
地蔵菩薩に取り付き嘆く

共に涙の御隙よりも
賺し給ひて御事らが親

我に預けてより遠き娑婆に
ハ帰るを待つぞさり乍ら

罪は我人ある習ひじやが
殊に子供のその罪科は

母の胎内十月が内は
苦痛様々此の世へ生まれ

四年五年また七年を
待つや待たずに今帰る故

ハ賽の河原へ迷い来る
父は無くとも母見へずとも

我を頼めや適はぬ浮き世
一言切り 後は涙のナア

溜り水よさア
「雜詞」 澄まず濁らず出ず入らず

六、山田の露 (十六分)

縁は不思議なものにて御座る

父は横萩豊成公よ

姉は当麻の中将姫で

妹白滝二八の姿

一の後に備はり給ふ

へ縁は甚だハ一限りなし

此処は津の国山田の谷に

治左衛門とて賢き男の子

内裏白洲の府に取られつつ

塵を拾ふて勤めていたが

御簾の恋風吹き捲りつつ

一の後の白滝様の

局丸寝の御姿をば

一目見るより早や恋となり

今日か明日かの病ひとなりて

最早勤めに出でざりければ

彼方こなたへ洩れ聞こへつつ

遂に内裏の御耳に入り

慈悲は上より召し下さるる

汝恋するその志

さても優しや殊勝なものよ

恋は日本天竺までも

貴き賤しき隔ては無いぞ

一首連らねよ歌詠むならば

望み適へて得させんものと

へ直の御官の有難やハ一

そこで男の子と白滝様の

両方互いの知恵比べにて

やがて百首の歌詠み給ふ

末の落句に白滝様の

へ詠ませ給ふは『雲谷も

濁り掛からぬこの白滝を

ちり心な掛けそ山田男の子』

と遊ばしければ

そこで男の子も先づ取り敢へず

へハア『水無月の

ちり] 稲葉の露とも焦がれつつ

山田へ落ちよ白滝の水』

と詠み上げければ

君を初めて公卿大臣も

さてもあつぱれ御名歌やと

上下さざめき御褒め給ふ

時に君より御褒美にて

愛し盛りの白滝様を

治左が女房と名を付け変へて

連れて帰れと召し下さるる

家の宝はかの薄墨に

守り刀は婿引出物

位授かる御巻物を

今に不思議は湧き出る露の

何時の世までも 山田の殿と

(言切り) 何ぼめでたのナア

若松よさア

(雑詞) 枝も栄える葉も繁る

七、お半長右衛門

(十五分)

此処は都の寅石町に
呉服商売締め括りよき
繻子の帯屋の長右衛門こそ
内の羽二重お絹と言ふて
綸子氣のない妻持ち乍ら
金紗同志の親しき仲に
おぼこ娘にお半と言ふて
年は十四で信濃屋作り
何の鹿の子と言ふではないが
兎角長右衛門に付き纏ひつつ
祇園参りや北野の様へ
参り見物あと青梅縮
それが高じて二人の仲は
抱いて練り絹遂枕
お絹此の事夢にも知らず
一家内なる似合いの方へ
嫁に兜羅綿油の小路
仲人仕掛けて頼みの印
代に紬やその甲斐絹なく
見るにお半が氣を揉み裏屋
明けて斯うよと早や岩田帯
聞いて男もうち驚きて
色は思案の外とは言へど
やがて四十の身を持ち乍ら

コレ十三、十四の蕾の娘
さても緞子や天鷲絨かなど
夫なに逢瀬もそぐはぬ縁を
結ぶ帯屋の軒早や過ぎて
妻に名残も押小路なれど
後や先なる娘気なれば
死んで行く身は細路伝ひ
胸もどぎづくあれ三井寺の
鐘は九つ東寺や持者か
いざや幽かに三筋の町も
女心は唯一筋に
思ひ詰めたる身は朝嵐
共に縮緬いざや此方へと
二人手に手を鶏の音つけて
最早桂の月影さへも
西に傾く身の捨て処
さあサア急がん共にと言ふて
石を袂に糸針止める
追ふて来たなら猶面目よ
見つけられじと足取り早く
倒けつ転びつ憂し風の神
(言切り) やがて桂のナア
川の水よきア
(雜詞) 澄まず濁らず出ず入らず

唄の節は、仏教和讃（国語で仏、菩薩、先徳などの徳行を讃嘆した歌）の節廻しを取入れた口説き節である。そのため、曲は単調で、同一旋律の繰返しが多い。唄の初めには「音頭様、音頭様、ハアエ許させ給へ ハア出したは 出したは」、終りには「音頭様 音頭様」と踊り子がそれぞれ囃子を入れ、唄の間にも「音頭様 ヨオホイ ヨオホイ ヨイヤナァ ドッコイ ドッコイ」と囃子を入れる。また一つの唄が終った時には、切り言葉（言切り）に応じて最後の一句を全員で囃す。

これらの囃子は演技の調子を整え、雰囲気盛り上げるためのものであるが、「音頭様 音頭様」の囃子には踊り開始の予告、音頭取りへの敬意などの意味も籠められているかもしれない。何れにせよ、哀調を帯びた曲の中に囃子の明るく賑やかな調子が入って音頭全体が変化の中にも統一を保っている。

三室清子、野上義臣両氏がそれぞれ採譜された白石踊音頭の楽譜を転載、紹介する。

白石踊音頭

石童丸

(昭和31年国指定許可申請書より)

む かし が たり を -
 - き く - さ - よ い と -
 (囃子) ア ソ レ ヲ イ
 ど あ は れ - なる -
 か - - - や い し - ど - - -
 (囃子) ホ ヲ ヲ * - イ
 ま - る は
 * - イ

註 Xは太鼓の胴をたゞきカッと鳴らす。

Oは太鼓のドンの音。

白石踊音頭 賽の河原

採譜 三室清子

譜 J=66

ハ リ ワ ヤ ホ リ ヤ オ ン ド サ マ ー
 オ ン ド サ マ ー × × × ○ と × と ○ と ○ と × ホ リ ヤ
 と よ い い さ て ゆ る さ せ た ま え
 ヨ ホ イ ヨ ホ イ ヨ イ ヤ ナ ー × と ○ と ○ と ア ー ル サ イ
 あ そ れ よ の な か の
 だ め が た ま は む じ ゃ の あ ら し
 ヨ ホ イ ヨ ホ イ ヨ イ ヤ ナ ー × と ○ と × と ○ と
 ち り て さ ま だ つ ー なら
 × と ○ と × ア ー ル サ イ (C) × と ○ と × と ○
 い と い え ど わ け て あ わ れ は め
 × と ○ と × ホ リ ヤ ヨ ホ イ ヨ ホ イ ヨ イ ヤ ナ ー
 い ど と ー しゃ ば の
 × と ○ と × と ○ と (e) × イ ー サ ア ヨ ホ ホ ー
 い の ー か わ ら あ ー で ー ー ー ー
 ハ ー ド ッ コ イ ド ッ コ イ (f) × と ○ と × (g) × と ○
 と お ー ど ー め た ア ン ア ン
 ヨ ホ イ ヨ ホ イ ヨ イ ヤ ナ ー etc.
 ア ン ア ハ ハ ン あ ー リ

註) 太鼓の打法を示す符号と長さ

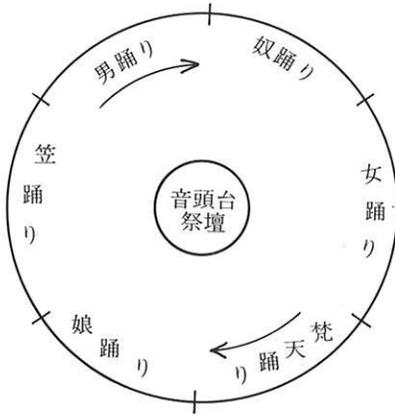
- = 胴打ち ○ = ♪ ○ = ♪
- × = 枹打ち × = ♪ × = ♪

○ 囃子の文句は、現地の人の言に従って三室氏の原作を改めているのでご了承を得たい。

7. 白石踊の演技形態

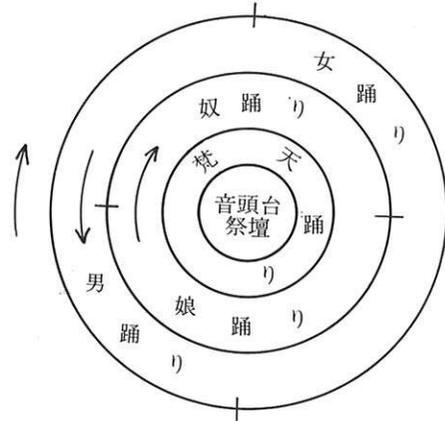
白石踊は輪踊りで、踊りの中央に櫓を組んで音頭台とし、盆踊（回向・供養踊）の際はこの他に祭壇を設けて戦没者の遺影を祀る。踊り手の数が多い場合は、各円の進行方向を交互に変えることができるが、これは動きが二様に見え、動的かつ空間の妙味が現われる。

白石踊の演技形態を図示すれば次の通りである。



単円の形態

踊り手が少ない時は
単円、右回りで踊る。



同心円の形態

踊り手が多い時は、音頭台を
中心に、1,2種類に統一された
円が幾つもできる。踊りの方
向は交互に変えることもでき
る。

単円の場合は一列の中に何種類かの踊り手が入り、同心円の場合は各円毎に踊りを統一することもできる。その際、踊りの種類別の配置は特に決まっておらず、各自、自由に同一種類の踊りの中に入って踊る。真打ち、横綱格のすぐれた音頭取、太鼓打ちを得ると、踊り手の所作も軽やかになり、勢い、多種類の踊りが飛出す。しかし、かかる最高潮に達するのは一夜のうちでも極く稀なことである。盆踊の際の形態は凡そ以上の如くであるが、白石島が狭隘で変化に富んだ地形の島嶼であるということから、踊り手の人数や踊る場所に応じて適宜多少の変化が加えられるのは止むを得ない。

蛇足乍ら補足すれば、白石踊の著しい独自性はその群舞形式の特異さにある。それぞれ衣裳や所作の異った踊りが一つ音頭に、一つ太鼓に合わせて踊られる。娘踊などは全くテンポも異っており、この踊りが一回踊る間に他の踊りは二回踊る。一見雑然とした種々雑多な形の踊りが一つのリズムに溶け込んで調和を生み出し、動的且つ華やかな中にも優雅さを失うことがない。ややもすれば単純素朴な形態に墮し易い盆踊の中にあつて、白石踊は間違いなく異彩を放つものであり、恐らくは全国的にも類例を見ないものであろう。往年の喧騒さは見られなくなったものの、浄瑠璃詞章の転用された口説きの音頭と太鼓の響きに揺れる時期の島に身を置くならば、それが実感されるであろう。

8. 現代の白石踊

江戸時代から島民が育み、伝承してきた白石踊は、離島という孤立的環境も手伝って他地域では廃絶して久しい祖先伝来の盆踊の姿をよく保っている。そのみならず、島民の才覚でより豊かな踊りを、豪華絢爛、優美艶麗、雄壮活発、繊細微妙それぞれの特徴をもち、総体として野趣と典雅さを兼ね備えた白石踊を創造しつつ今日に至ったのである。

1928年（昭和3）に結成された白石踊り回向団（白石踊り会の前身）が、同年、山陽新聞社主催の民謡舞踊大会で第1位の栄に浴して以来、1976年（昭和51）に国の重要無形民俗文化財指定を受けるに至るまでの白石踊の発展ぶりは正に島民の不断の努力が昇華、結実したものといつてよい。

しかし、反面、次のような苦言も呈せられていることを紹介しておきたい。

郷土芸能への認識が高まる中で、郷土芸能紹介という美名の下に各種催しのアトラクションに招待されるようになって昔日の素朴さ、土と海の匂いが失なわれつつあるのは残念である。白石島という歴史と環境の中で生まれ、島民相互の紐帯の役割を果たし、生活の喜びや悲しみが込められていた祭りが、他人のための催しとなった時はただのショー、見せ物といわれても止むを得まい。

郷土芸能と雖も時代の影響を受けることは避け難いが、出来得る限り昔日のままに残してほしい。可能ならば、アトラクション出演などは断って、見たければ盆の三日に島に來いといった心意気を示してもらいたい。（神野力・ノートルダム清心女子大学教授「岡山白石島の盆踊り」及び同教授「寸言」——1979. 2, 16付「朝日新聞・第二岡山版」掲載——を要約）

更に、白石踊会副会長・山川一尾氏も自戒の念をこめて次のように語っておられる。

民間に伝承された素朴な白石踊が、衣裳が華美に流れるなど、最近ややもすると社会大衆に迎合する嫌いがある。これは余程考え直す必要があり、当会としても従来 of 踊りを維持するために努力したい。